

メソポタミア先史建築の発展研究

復元図の問題と今後の展望

The development process of Mesopotamia prehistoric architecture

Problems with restoration diagrams and future prospects

○松枝大貴¹, 重枝豊²*Daiki MATSUE¹, Yutaka SHIGEEDA²

The way prehistoric architecture is treated in the current Western architectural history has not changed significantly since the 1960s, as shown in Western architectural maps and architectural systems. Today, many archaeological sites and excavations have been carried out by archaeological researchers, but architectural history researchers are hardly directly involved in excavation. Research has not been renewed or verified, and the movement of systematization has stagnated for nearly 40 years. In this paper, we will verify the accuracy of the elevation of the restored elevation when extracting the maximum height of the architectural remains as an essay to systematize the architectural remains.

1. はじめに

現在の西洋建築史における先史建築の扱われ方は日本においては西洋建築図集や建築学体系に示されるように60年代から大きな変化は見られない。今日、数多くの遺構や発掘調査が考古学研究者によって進んでいるが建築史の研究者がほとんど直接発掘に関わっていないことがあげられる。日本で既往研究として1959年に小林文次^[1]によって著された「建築の誕生」、岡田保良が翻訳した1987年にMuayad Said Basim Damerji（以降ダメルジ）によって著された「メソポタミア建築序説」があげられる。小林は建築様式ごとに体系化を試み、ダメルジはすべての建築を等価に扱い部屋の連結の仕方・扉の形状などから建築分類及び体系化を試みた。しかし両者とも研究・検証の余地を残している。その後これらの研究の更新・検証も行われておらず40年近く体系化の動きは停滞している。本稿では建築遺構の体系化をこころみための試論として建築遺構の最大高さを抽出する際に復元立面図の高さの正確さを検証していく。

2. 先行研究

LENZEN.H（以降レンツェン）が1955年に発表した論文では神殿遺構の発展過程を文明中心の変遷とともに論じている。この手法において中庭の有無や中央空間の形状といった複数の属性をあまり関連づけることなくすべての部屋（天井の有無ではなく壁で四方を囲まれた空間）を分類する方法を用いた。この方法はダメルジに至るまで平面型式研究の中心となる。この平面型式研究を中心に復元立面の作成を各調査隊の報告書で提示するようになる。

主に復元立面を作成し大系化を試みている研究者としてハインリヒが挙げることができる。ハインリヒは1982年に「古代メソポタミアにおける宮殿」において各平面形式研究を用いながらも大空間が中庭なのか天井があったのかを詳細に論述している。その中で平面的特徴が決定した完掘されている遺跡に関しては復元立面も掲載している。現在各調査隊発表の復元図はその後検証されることなく暫定として50年以上も使われているものばかりである。その根拠としては発掘された遺構がすでに風化もしくは発掘の継続により焼失してしまっていることが挙げられる。

3. 分析

今回は復元図の高さが壁厚・素材から実際に建築が自立していたのかどうかを寸法の確認によって実証していく。まず比較分析するために同時代・同地域における建築遺構を抽出する。南メソポタミアにおいて文化圏・素材・時代が近似する遺跡としてテルアスマルとウルクが挙げられる。この両遺跡の建築は一部復元図が作成されているのでこれらを用いて分析していく。

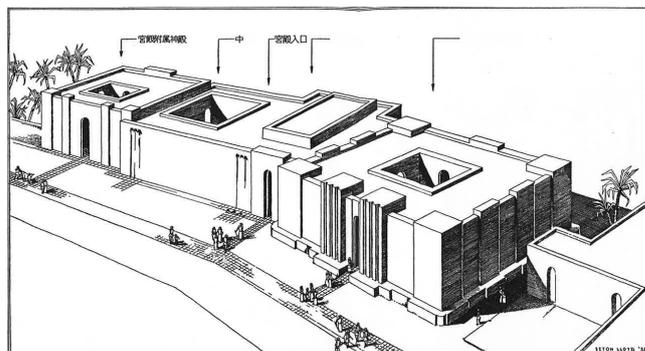


Figure 1. テルアスマル シュシン神殿

ロイド作

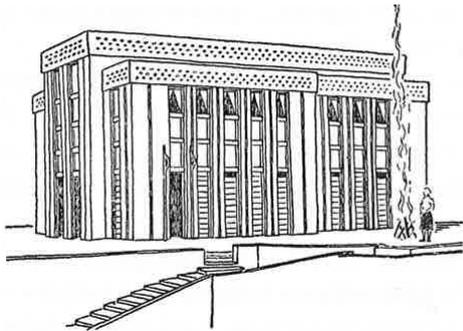


Figure 2. ウルク 白色神殿 ハイリヒ作

テルアスマルはBC 2500 地位に属する建築遺構であり、ウルク・白色神殿は BC2400 付近の地位に属しているため同年代としてみなす。各々推定高さは以下のとおりである。

テルアスマル・シュシン神殿 9.5 ～ 10.2m

ウルク・白色神殿 5.9 ～ 6.5m

以上のとおりになっている。用途・宗教はほぼ同じであるのに3m～4.3mの差を生んでいる。

これらの壁体の厚さを計測し壁体の高さと同様に考察を加えていく。

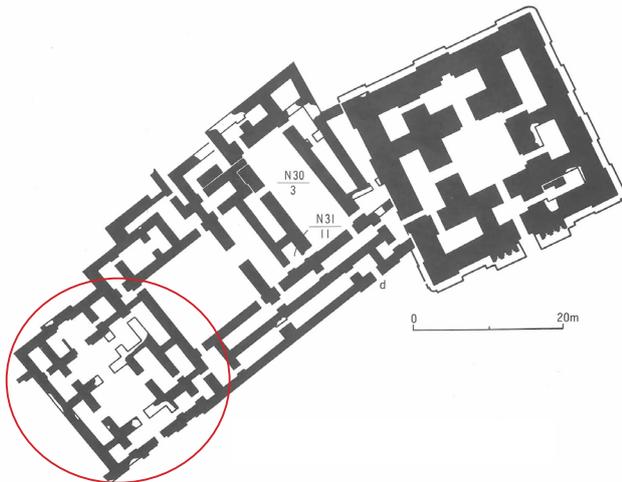


Figure 3. テルアスマル シュシン神殿 平面図

Figure3 テルアスマル・シュシン神殿において比較研究を行うため面積構成が近似している箇所から壁厚を抽出していく。一方ウルクに関しては白色神殿はすべての壁体について計測し考察していく。

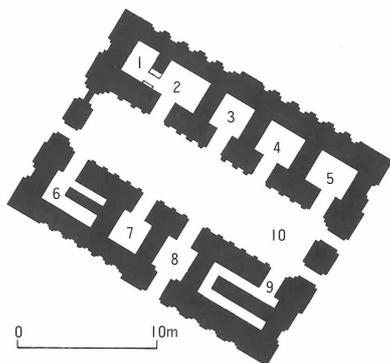


Figure 4. ウルク 白色神殿 平面図

計測の結果は以下のとおりである。

テルアスマル シュシン神殿 宮殿附属神殿部

外周 平均 0.9m ～ 1.2m 内壁 0.8m 高さ 9.5m

ウルク 白色神殿

外周ニッチ部 2.1 mニッチなし 2.5m 内壁 1.5m/1.9m

高さ側室 5.9m 主室 6.5m

以上の結果となった。これらの結果からシュシン神殿附属神殿とウルク白色神殿は規模・材質に関してはほぼ同じ条件であるにもかかわらず平均高さと壁厚に大きな違いがあらわされた。高さを壁厚で割り比率を計算するとシュシン神殿は 7.92、白色神殿は 2.36 と差が開いた。このことから考えられることは以下である。

一つはテルアスマルが自立するとした場合白色神殿は神殿としての荘厳性やヒエラルキー創出のため壁厚及び高さを低く設定した可能性。次に考えられることはテルアスマルが自立せず統治神殿の連続で描かれてしまった可能性である。白色神殿は石碑よりある程度のプロポーションが把握されたうえで描画されており、白色神殿が自立しないとは考えにくい。

5. おわりに

今回壁体と高さの関係に注目して分析を行い、素材・環境年代すべてを同程度にし壁厚及び高さのみの比較になるように設定した。得られた結果としては壁厚 / 高さの比率に大きな差分があり高さの根拠を構造的に考える際シュシン神殿の壁体が経験的に持たないと感じてはいたが数字においても復元図の怪しさを示せたと考える。一方限界高さを考える際に実際の日干し煉瓦自体の耐力・塑性変形限界荷重等必要な事項が多くあると感じた。現在西アジア学会において実験考古学的調査が行われているが今回はそのデータを掲載することができなかった。

今後既存で持っている資料で今回のように比較分析が可能な遺構を洗い出し壁厚高さ比をだし、壁厚と高さの関係を多く出すことで現在の復元図面のような考察から少し進展させることができるのではないかと考える。

注釈・参考文献

- [1] 小林文次 日本大学理工学部建築学科教授
- [2] Muayad Said Basim Damerji イラク文化庁長官 各発掘現場の隊長を歴任
- [3] メソポタミア建築序章 - 門と扉の建築術 - Muayad Said Basim Damerji 1987/11/3 国士舘大学イラク古代文化研究所
- [4] メソポタミアとエラム、その影響関係 日本建築学会大会学術講演会梗概集 1997
- [5] メソポタミア地方の建築史研究 堀内清治 建築雑誌 昭和 43 年 1 月号